

あなたはだあれ

舟崎靖子・さく かみやしん・え





あなたは だあれ (大日本ようねん文庫)

1980年8月25日 第1刷発行

舟崎靖子・さく／かみや しん・え

発行者／佐久間裕三

発行所／大日本図書 (104)東京都中央区銀座1-9-10

電話03(561)8671
振替 東京9-219

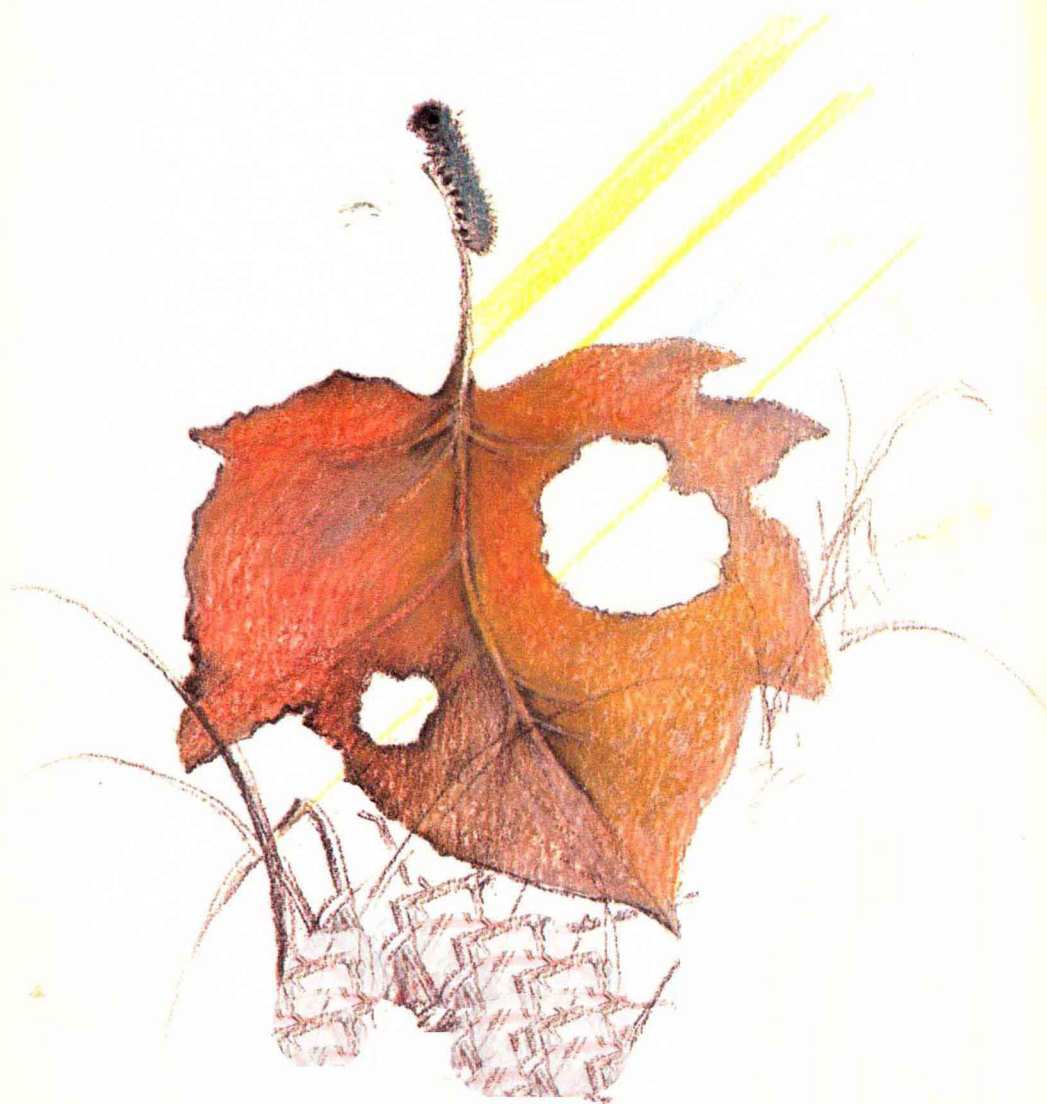
印刷
金羊社

製本
宮田製本

© Y.FUNASAKI & S.KAMIYA 1980

あなたはだあれ

舟崎 靖子・さく かみや しん・え



ケヤキの目のまえには、せいのたかいがけが、
かべのように、たちふさがっていました。

「どうしてぼくは、こんなたいくつなところに、
めをだしてしまっただろう」

ケヤキは、いつもそうおもいながら、くらししていました。

春^{はる}になれば、がけにも、いろいろな草^{くさ}が、めをだします。

けれど冬^{ふゆ}には、みんなかれて、

あかちやけた土^{つち}ばかりに なってしまいます。

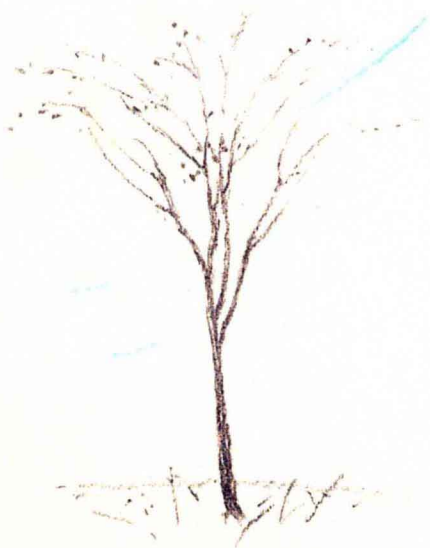
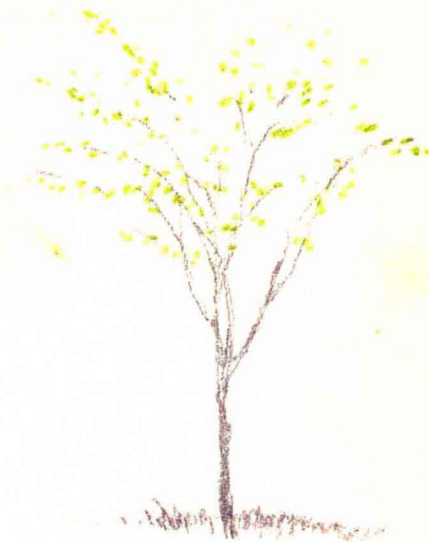
ともだちがひとりもないケヤキは、

しかたなしに、手品^{てじな}をして、あそんでいました。





ケヤキが している手品は、てじな たったひとつです。



春^{はる}、ケヤキは、えだのあちこちに、

みどり色^{いろ}にひかるめを、いっぱいつけます。

夏^{なつ}、ケヤキは、かぞえきれないはっぱをつけ、

じめんに、大きなかげをつくります。

秋^{あき}、ケヤキは、みどり色^{いろ}だったはっぱを、ちや色^{いろ}にかえ、

風^{かぜ}にえだをゆすつては、かぞえきれないはっぱを、ちらします。

けれど、冬^{ふゆ}になると、そのはっぱも、

みんな ちつてしまい、手品^{てじな}はできません。

冬^{ふゆ}の ある日^ひのことです。

がけの上^{うへ}から、こんな声^{こゑ}がきこえてきました。

「やまあらしくん、どう、ぼくのあたらしい家、きにいった？」

それは、いままで、きいたことのない声こゑでした。

「ながめはいいし、おひさまのひかりはいっぱいあたるし、

いいところじゃないか」

それは、やまあしくんの、声こゑのようです。

どうやら、だれかさんが、がけのすぐ上うへに、ひっこしてきたようです。

だれかさんで、いったい、どんなひとでしょう。

けれどがけは、あんまりたかくそびえているので、ケヤキが、いくら
せのびしても、だれかさんも、その家いえも、みえやしません。





「わあー、さかなのもようのカーテン、とってもいいわね」

また、ききなれない声こえがきこえてきました。

「りすさん、花はなでかざった、きみのぼうしも、とってもにあうよ」

と、だれかさんの声こえです。

こんどは、だれかさんの家いえに、りすさんがあそびにきたようです。

「いま、アップルパイと、ぶどうのジュースで、おさんじにするからね」

だれかさんの声こえは、それっきり、きこえなくなりました。

だれかさんの声こえは、三日かも四日かもきこえないことがありました。

ケヤキは、やがてそのわけがわかりました。

がけの上うへの、だれかさんの声こえは、

南風みなみかぜのふくときだけ、風かぜにはこばれてくるのです。

「ほんとにいいのかい？」

また、だれかさんの、あたらしいともだちが、やってきたようです。

だれかさんの、じょうきげんな声^{こゑ}も、きこえてきます。

「えんりよしないで、さあ、おはいりよ、とかげさん。

ステッキは、いりぐちにおいといてさ」

こんどは、とかげさんが、やってきたようです。

だれかさんには、なんておともだちがいっぱいいるんでしょう。

ひとりぼっちのじぶんとは大^{おお}ちがいだと、ケヤキはおもいました。

「きょうは、ともだちもいっしょなんだけれど」

と、とかげさん^{こゑ}の声です。



「いいよ。きみのともだちは、ぼくのともだちさ。おはいりよ」

だれかさんが、いつています。

「しょうかいするよ。ぼくのともだちの、もぐらさん」

とかげの声こゑが、もぐらさんをしょうかいしました。

が、風かぜがとぎれたせいでしょうか、もぐらさんのあいさつは、

ききとれませんでした。

「はじめまして、もぐらさん。きみのマント、なんてやわらかいんだろう。

ビロードだね」

と、だれかさんの声こゑです。

「ありがとう。きみのしっぽも、なかなかりっぱじゃないか」

と、もぐらさんの声こゑです。

やがて、おんがくがきこえてきました。おんがくは、南風みなかぜにのって、
その日ひいちにちじゅう、
きこえていました。





ケヤキは、せっせと手品^{てじな}にはげみました。

ケヤキは、手品^{てじな}をくりかえし　くりかえしやるうちに、

いつか大きな木^きになって、がけの上^{うへ}に顔^{かお}を出すことができるとおもったからです。

たべることがすきで、りっぱなしっぽがあつて、おともだちがいっぱいいて、

さかなのもようのカーテンのゆれる家^{いえ}にすんでいる　だれかさんで、

どんなひとでしょう。

「あなたは　だあれ。あなたは　だあれ」

ケヤキはつぶやきながら、くる日^ひもくる日^ひも、

がけより　せいがたくなる日^ひを　ゆめみていました。